

一生出会えないかと思っていた憧れの虫 水生昆虫の王者・タガメ

「なんてことだ…この手で…タガメを持っている！！！」
2025年はとんでもない年になった。まさか、我が人生で野生のタガメを見ることが出来る日が来ようとは！！

始まりは1年生のユキナガとの出会いだった。入学してすぐ「カメムシ好きの龍平先生にぜひタガメを見せたい」と話しかけてくれた（タガメはカメムシの仲間である）。彼は中2の時から高校に見学に来ていて、何度もおしゃべりをしていた。なんでも、幼少期から栃木にある里山と繋がりがあり、そこでは多数のタガメが見られるとのこと。今、日本でタガメは激減しており、野生の姿を見るのは極めて難しい。タガメは知名度が高く密猟が多いため、数少ない有名産地で勝手に採集しようものなら下手すりゃ警察沙汰だし、だからといって自力で新産地を見つけることは厳しい。それこそ、“コネ”でもない限りもう死ぬまで見れないんだろうなと内心諦めていた。ところが、突然その“コネ”の方からやってきてくれたのだ！ユキナガが、タガメの場所に案内しますと言ってくれた時は、発狂しながら廊下を走り回りたいぐらい嬉しかった。マニアックな生徒が集まる最高の学校だ、ここは！

ということで、7月と10月に二度、公式的にお邪魔させていただき、幼虫も成虫も存分に観察させていただいた。ぼくが興奮しまくっていた様子を見て、現地の方が「そうかあ珍しがらなきゃいけないよなあ。ここじゃ当たり前にいるからなあ。」と言っていたのが印象的だった。当たり前のようにタガメがいる。昔は日本全体でそれが当たり前だった。でも今やそんな場所の方が珍しくなってしまった。この田んぼは背後に雑木林が広がり、タガメは冬の間はその森の中で過ごす。田んぼと森がセットになっていることが重要なのだ。「里山」というものの重要性は生物の教科書にも登場するのだが、自分自身も今まで接点がなかったため、「教科書の中の出来事」でしかなかった。小さい頃から憧れていたタガメ、雑木林、里山といった存在が一気に身近なものになり、今年は本当に自分にとって大事な年となった。（里山での活動についてはユキナガが書いたVol.162,163へ）



つかまれて暴れるタガメ

カマを振り回しながら大暴れ。前脚が極太で迫力がすごい！希少種のため、このあとすぐに逃がしました。



野生のタガメ *Lethocerus deyrollei* のメス 10月 環境省レッドリスト絶滅危惧Ⅱ類（VU）

田んぼに鎮座するこの王者たる風格…。あまりにもかっこよすぎる。タガメは名の通り「田んぼ」に生息する「カメムシ」の仲間で、水生昆虫の中で日本一大きい。田んぼの減少、農薬の使用により日本各地で激減し、今ではごく限られた場所で見られない。東京では絶滅してしまった。種の保存法の特定第二種に指定され、販売目的での採集・売買が禁止されている。



タガメの幼虫（すべて野生）（左）1齢幼虫。黒いしましま。自分よりもだいぶ大きなアカハライモリの幼生を捕食中。（中央）3齢または4齢幼虫。両前脚のカマでがっちりイモリを捕まえて捕食中。（右）5齢（終齢）幼虫。5齢になるとかなり大きい。すべて7月。栃木県。

水中の様子（飼育下）

越冬時以外はふつう水中におり、お尻の先の呼吸管だけ水面に出して餌を待ち伏せしている。この写真は文化祭の「蟲部屋」でユキナガが展示していた個体。水槽のガラスにカメラを押し付けて撮影。

9月

